輝く世界を求めて　～歴史改変者達の戦い～

鏡花水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
輝く世界を求めて　～歴史改変者達の戦い～

【Ｎコード】
Ｎ８９７２Ｏ

【作者名】
鏡花水月

【あらすじ】
時が破壊され、世界が“星の停止”を迎えた時代――――――多くのポケモンは心を失っていた。心を保つことができた一部のポケモン達は何故世界がこのようなことになったのか調べ始める。それは大いなる冒険への序章でもあった。

プロローグ

「ちっ……」
真っ暗な世界。昼も夜も無い、空気の流れも無い。岩が宙に浮いていて、動きが感じられない。

――――――星の停止――――――

その現象はこう呼ばれていた。何故そうなったかは分からない。ポケモン達は心を失い、暴れまわる、世界の破滅といっても過言ではない。その中に、数少ない心を持ったポケモンがいた。緑と緋色をベースとし、頭と両手首に深緑色の葉っぱをはやしたトカゲのようなポケモン“ジュプトル”。彼は目の前のドクロッグと対峙していた。
草タイプ故に毒・格闘タイプのドクロッグとの相性は悪い。最悪の展開だった。
「キシャアアアアッ！！」
ドクロッグはジュプトルに毒づきを仕掛けてきた。
遅い、かわせる。
彼は大きく横っ跳びをしてその技をかわすと、勢い余って繁みの方に突っ込んでいくドクロッグに目をやった。ジュプトルはこの間に逃げてしまおうと背を向ける。
そしてドクロッグが繁みの入り口に差しかかったとき――――――
「うわーーーーーーーっ！！」
悲鳴が真っ暗な森の中に轟き、ドクロッグが仰向けによろめいた。
ジュプトルはびっくりしてさっきの方向に目を戻す。
「あっち行けーーーーーっ！！」
その後、再び起こった叫びと共に、ドクロッグが一瞬痙攣し、大きく吹っ飛んだ。それはジュプトルの方に向かっていった。

何が起こったのか分からないまま彼は振り払おうとリーフブレードを構えた。
そのとき、何かが暗がりから飛び出してきた。
「ふんむっ！」
そのままドクロッグの鳩尾あたりを殴る。
その何かは少年だった。可愛らしい大きな瞳に恐怖の色を浮かべている。それに対し、体勢を立て直したドクロッグが怒り狂ったように、有毒な爪を少年に身がまえた。
――――――危ねぇ！
危険を察したジュプトルはリーフブレードを構えるとドクロッグに狙いを定める。
だがその前に状況に変化が起こった。
「やあああああああああ！！」
少年は半身を後にかわすことで毒づきをかわし、そのまま一回転すると振り向きざまに拳をドクロッグの頬に入れていた。裏拳だ。
「グェ……」
ドクロッグは力無い断末魔をあげると地に倒れた。
「ふう……危なかったな……！？」
少年は口の中で呟きながらジュプトルの気配に気づいた。一難去ってまた一難、といったところか。せめてジュプトルが“心を失ったポケモン”でないことを祈る。
ジュプトルはそんな少年の怯える様子など無視して訊ねる。肌色の小さな顔、更に頭には首の動きに合わせるように動くサラサラで長い毛が生えている。それに布を縫い合わせて作った服というものを身に纏っている。見たことがない、ポケモンではない――――――
そう、少年は人間だったのだ。
「何故、人間である御前がここにいるのだ？」
人間は北の山脈のさらに北の小さな村にひっそりと住んでいる。北の山脈は深すぎるため、例え強靭なポケモンでも抜ける途中で倒れ

てしまうのがオチだ。
ジュプトルはその人間が知り合いに二人もいることに驚いていた。
「僕だってこの世界が嫌なんだよ。世界を変えるために来たんだ」
少年はジュプトルに害が無いと見ると、落ち着き払った口調で言った。
「そうか、それなら“星の調査団”に入ると良いんじゃないか？」
「星の調査団？」
「ああ、言うより見た方が良い。ついてこい」
ジュプトルは踵を返して歩き出した。

Rhapsody:1　星の調査団

「ねぇ」
少年は歩きながらジュプトルに尋ねた。
「“星の調査団”って何？」
「御前と同じ望みを持つ者……この暗黒しかない世界を変えたい、と思う者達がその世界を改変しようと活動している団体だ」
「？？？」
少年はジュプトルの言うことの意味が分からずに首をかしげている。
「あー……御前と同じことを考えている者の集まり、ってところだ」
ジュプトルが噛み砕いて言うとようやく理解できたようだ。
「そして君はそこの一員？」
「ああ、ジュプトル、という」
そのまま会話も途切れ、二人共黙ったまま暗い森の中を歩いていった。

「そこだ」
ジュプトルが唐突に言った。
見ると、松明がパチパチと燃え、数十匹のポケモン達が談笑している。
「？　ジュプトル、なんだそいつは？」
一人のトロピウスが少年を見つけると、連行してきたジュプトルに訊いた。
「森の中で遭った“人間”だ。この世界を変えたい、と言ったから勧誘する為に連れてきた」
彼は素っ気無く返すと数あるテントの中で一番大きいテントの方へ歩いていった。
トロピウスは不思議そうな顔をしている。

「おい、御前。星の調査団に入るってことでいいんならさっさと来い」
彼は心を持ったポケモンの集まりを、珍しそうに見つめる少年を促した。
「あ、うん」
少年も歩き出した。

テントの入り口を捲ると、二つの影が会話しているのが見えた。
「おい団長。新入り希望者を連れてきた」
ジュプトルがそう言うと、二つの影が振り向いた。
影の一つは金色の体に巨大な翼を左右につけたポケモン、カイリュー。
そしてもう一つは華奢なイメージに艶やかな長い黒髪を後頭部で束ねた、いわばポニーテールの髪型。翡翠のような綺麗な瞳の――――人間の少女だった。
その少女は少年を指し、顔を引き攣らせ、暫く口を開け閉めしてワナワナ震えていた。
「？」
ジュプトルとカイリューがよく分からない、と言いたげに顔を反らす。
その先には少年が――――――やはり大きな目を更に大きく広げて顔をひきつらせているのが見える。
やがて二人、ほぼ同時に叫んだ。
「シ、シアン！！」
「レイナ！？」
『どうしてここに！？』
「……」
そのまま辺り一帯を沈黙が支配する。
数十秒間続いた沈黙は、カイリューが話しを切りだして終わった。

「……知り合い？」
「そうよ。貴方、シアンよね？」
「うん」
シアンと呼ばれた少年は頷いて答える。
「星の調査団に入りたいの？」
「そうだよ」
そこでカイリューが話しに介入した。
「……どうやら、二人は知り合いのようだねぇ。私はカイリュー。星の調査団団長を務めるもの。君は……」
「さっき申しました。シアン＝ロビンソンといいます」
「うん、それじゃシアン君、団員に紹介するから――――――」
「“シアン”と呼んで構いません」
「嗚呼、こっちに来てくれ」

「こちら、今回新しく入団したシアンだ。皆、分かってると思うが、新入りだからといって粗末な扱いはしないように。した者は……地獄を見せてやる」
カイリューは不吉なひと言を余韻に残し、シアンに自己紹介を促した。
「どうも、御紹介にお預かり致しました。シアンです。よろしくお願いします」
彼は礼儀正しく、深々と腰を折った。
「それでは、解散っ！」
カイリューが鋭く指示を出した。周りに集まったポケモン達は、皆、テントに入るなり二、三人の塊で集まって談笑を始めるなり、自由にしていた。
「僕は……」
シアンはそんな中やることが見つからずに戸惑っていた。
「今日はやることはないわ」
隣にいたレイナが櫛で髪を梳かしながら言う。

「やることは無い？」
「今日は休日みたいなもの、明日からまた無限目録蔵（インフィニティ・ライブラリィ）を探しに出かけるわ」
「無限目録蔵（インフィニティ・ライブラリィ）？」
シアンの問に対し、レイナが簡単に噛み砕いて言った。
「何故、この世界で星の停止が起こったか……それを探すのよ。誰だって原因も分からない事象を今ここで食い止めろ、なんて出来るわけないでしょ」
そこまで言われ、シアンは理解できた
「じゃあ無限目録蔵（インフィニティ・ライブラリィ）は……」
「この星の停止の原因を調べる為に必要な施設。沢山の書物がある場所よ。それを探しにいくの」

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：２　捜査開始（前書き）

ふう、なんとか更新更新♪

シアン

「更新ほっぽり過ぎだよ（汗）本編が進むのにあわせりゃ良いのに」

そこまで暇じゃないんだぁぁぁぁぁぁぁ！

シアン

「暇の塊が何を言ってんだか」

Rhapsody:2　捜査開始

「おい、起きろ」
ジュプトルが寝袋にくるまって寝息をたてるシアンを揺する。
「んん……？」
シアンは意外と簡単に目覚めると上半身を起こす。
「……何？」
彼はいつもは大きな眼を眠さのあまり垂らして寝ぼけ声を出す。
そのあどけない容姿に顔を赤らめたポケモンがいたりいなかったり。
ジュプトルはそんなことは御構い無しに言う。
「無限目録蔵（インフィニティ・ライブラリィ）を探しにいくぞ」
「？　目覚めの挨拶とかは？」
「そんなの無い」
ジュプトルはシアンの腕を掴むと思いっきり引っ張り出す。
「星の調査団は挨拶などの習慣を持たない。定期的に会議を行い、その時に自分の成果を報告するだけだ。それ以外は探索などを行う。今の目的は昨日レイナが言ったように無限目録蔵の捜索というわけだ。分かるな？」
ジュプトルが解説をするとシアンは黙って頷いて
「じゃあその無限目録蔵って何処にあるの？」
と聞いた。ジュプトルは呆れたようにかえす。
「分かってたら今更探索などしてないだろうが。さっさと行くぞ」
そう言ってテントから出ていく。シアンはコイキングの干物をかじりながらテントから這い出る。
キョロキョロと辺りを見渡すとジュプトルが森の方へ入っていくのが見えた。

「って危ないな……」

シアンとジュプトルは二匹のゴルダックに出くわした。両方とも目に殺気が燈っている。闇に犯されている証拠だ。
「シアン、準備は良いな？」
「これでも腕には自信があるよ」
そんなやり取りをしながらジュプトルはリーフブレードを構える。
シアンは腰に差して置いた反り曲がった細い木の棒――――――木刀を抜き放つ。
「グォアアアーーーーーッ！！」
ゴルダックは一匹はジュプトルに、もう一匹はシアンに襲いかかってきた。
シアンはその爪を紙一重でかわしきり、ゴルダックの背中に斬撃を叩き込む。
その細腕に振るわれているとは思えない一撃を喰らったゴルダックは悶絶する。
ジュプトルがもう一匹を上空から投げ落とし、二匹は互いにぶつかって目を回す。
これで終わったと思った。しかし、その音を聞きつけたらしいリングマがシアン達の所に来た。
シアンは、それがリングマであることに気付かなかった。
木刀をさっきのように力強く叩き込む。それが間違っていた。
「お！　オイ待てシア――――――」
「グオオオオオオオオオッ！」
ジュプトルの制止の声がリングマの怒りの咆哮に掻き消される。そのままリングマは腕を振りかぶって、拳をシアンの胸に叩きこんだ！
「グファ……」
シアンは一瞬うめき声をあげると仰向けに倒れていく。
「シアン！」
ジュプトルは焦りの声と共にリングマの前に立ちはだかった。
「グォアアアア！」
リングマが爪を振り下ろすタイミングに合わせて、彼は軽くジャン

プする。そしてリングマの頭上を越えていく。リングマがジュプトルを見定めようと上を向いた瞬間……
「ガァアッ！」
思いっきり仰け反った。シアンが上を向いたために露わになっているその顎を木刀で殴ったのだ。
シアンはリングマの攻撃を受けたわけでも気絶していた訳でも無かった。あの拳は木刀で防いでいた。
ただ攻撃のチャンスを見極めるべく、わざと倒れていたのだ。
「ジュプトル！」
「あいよっ！！」
後に回り込んでいたジュプトルがその図体にタネマシンガンを浴びせる。
「グォアアアアアア！」
再び立ち上がったリングマの、怒り狂った声がその断末魔だった。
ズシャア…
リングマは倒れ、シアンとジュプトルに安全が訪れた。
「やった！」
「コイツが起き上らないうちに行くぞ」
「うん」

その頃、別の場所でとあるポケモンが独り言を言っていた。
「ウィイ、ヨノワール様」
華奢で紺色の体。本来目がある所に宝石が付いているポケモン、ヤミラミがそう言うと、何処からか声がした。
「なんだ？」
ヨノワールと呼ばれた者の声はくぐもっていて、重い。
「星の調査団に、新参者が訪れました」
「種族は？」
「そ、それが……」
ヤミラミが口ごもる。

「なんだ、何か言い難いことか？」
「い、いえ、それが人間なんです」
「……」
一抹の沈黙のあと、ヨノワールは口を開く。
「人間だろうがポケモンだろうが関係ない。我等が義務は歴史改変の防止。星の調査団が世界の時の再生の為なら歴史改変もやむを得ないと言い出したら……始末しろ」
「はい」
不穏なやり取りのあと、会話は打ち切られた。

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：３　開かずの扉（前書き）

シアン
「アンタ遅すぎだよ！　どんだけ更新滞納してんだよ！」

ごめんごめん。新伝説のクリスマススペシャルとかやってたらコレ書く暇とか無くなっちゃってさぁ。

シアン
「もう、最悪だよ！　次２週間以上開けたら僕の斬撃が飛ぶからね！」

分かった分かった

Rhapsody：3　開かずの扉

シアンとジュプトルは暗い木立の中を突き進んでいった。
途中で襲いかかってきたポケモン達は皆ジュプトルのリーフブレードとシアンの木刀を利用した一撃で薙ぎ倒されている。順調に見えた二人。だが――――――。
「グオオオオオオ！」
流石に長時間走るとなるときつい。今も目の前のマグカルゴの対処に手こずっているところだ。
「やあっ！」
シアンがいくら木刀を打ちつけてもマグカルゴはビクともしない。ジュプトルのリーフブレードはタイプ相性の影響もあって効果が薄い。徐々に敵の体力は削られていったが、これではきりが無い。
「ブォオオオオオオ！！」
その時、マグカルゴがジュプトルに岩落としを仕掛けた。ジュプトルはなんとか防いだが、大きく吹っ飛ばされる。
――――――――――ガァン！！！
後の壁にジュプトルがぶつかった時の音を聞いた時、シアンは違和感を覚え、その大きい目に疑問の色を浮かべる。ジュプトルがぶつかった壁をシアンが凝視していた時――――――
「シアン！　よそ見するな！」
ジュプトルが叫ぶ。シアンがはっとして後を向くとマグカルゴの岩落としが、今度はシアンを狙っていた。
「はっ！」
防御の時間が無いと見てとったのか、彼はそのままジャンプする。力強い。人間の、ましてその華奢な脚による跳躍とは思えない。マグカルゴは気付かない。上空にいるシアンの狙いに。自分の頭を強打する為に木刀がかざされていることに。
「ふんむっ！」

シアンは全身の力を籠めてマグカルゴの頭に斬撃を叩き込む。
その必殺の一撃を受けた紅蓮のポケモンはもんどりうって昏倒した。
「終わった……か？」
ジュプトルが腰の煤を払いながら立ち上がる。
「まぁ、とりあえずは安心ってとこだよ。それよりジュプトル」
「なんだ？」
「君の後。壁があるよね」
「あん？　それが如何した？」
「臭いよ」
「……は？」
ジュプトルは一瞬彼の言うことが理解できなかった。
「臭いって、そういう意味じゃなくて何か怪しいってこと」
「怪しい？　この壁がか？」
ジュプトルは後を向いて壁をコンコンと叩く。そこから聞こえてきたのは鉄の扉を叩いた時に出るような錆びた音だった。決して岩を叩いた時に出る音ではない。
「ほら、普通じゃないよね、この音は」
「ああ……だが……」
ジュプトルは何か納得がいっていないようだ。いや、納得がいっていないのではない。
扉があると彼は踏んでいる。だが壁は厚い苔に覆われ、仮に扉があろうと開けることなど出来ない。
「厚い苔だね……星の停止が起こったからかな？」
シアンが推測を述べる。その推測はおおよそ間違ってはいなかった。星の停止の起こりは５０００年ほど前。それからずっとほったらかされていたのだ。
今は時が破壊されているが、植物、人間、ポケモンなどの生命活動は続いている。故に苔がこうもびっしりと張り付いているのだ。
「とりあえず……開けてみない？」
シアンが言いだした。彼はジュプトルの意見など聞かずに一度鞘に

おさめた木刀を抜く。一瞬後、その細腕が力強い一撃を苔の群れに送る。
「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！！」
だが、扉はビクともしない。ジュプトルがリーフブレードを放ったが、いとも簡単に弾き返されてしまう。
「こうなったら一旦星の調査団のキャンプにでも戻ってリザードンかブースターを呼んでくるしかねぇが……ん？」
ジュプトルは地面に倒れているマグカルゴに目をやった。そして何かを思いついたらしく、顎に手をあててマグカルゴを見つめる。そして、シアンに言った。
「コイツを使えばいいんじゃないか？」
「は？」
シアンは間抜けな声を出す。
「だから、コイツの炎で苔を焼き尽くすんだよ」
「でも……もう気絶しちゃってるし……それに心を失ったポケモンだよね？　力を貸してくれるかな？」
ジュプトルは確固たる自信を持って言った。
「頭が固いな。別にコイツが炎を吐ける状態であろうが無かろうが関係ないんだよ」
「？　じゃあ、どういうつもり？」
シアンはますます意味が分からなくなる。ジュプトルは見かねたように、最大のヒントを出した。
「マグカルゴの特性はなんだ？」
「……確か炎の体に……ってまさかジュプトル……」
「そのまさかだ」

マグカルゴの体が、扉にびっしりしがみ付いた苔を燃やしつくすのに、時間はかからなかった。
5分も経つと、その硬い扉は緩み、ぐらぐらと揺れるようになって

いた。
「もう良いよね。せーのっ！」
シアンはかけ声と共に至いっぱいの力を木刀に乗せる。
斬撃を喰らった扉は片方が吹き飛び、かろうじて残ったもう片方もひしゃげ、見るも無残な形となっていた。
ジュプトルは驚愕した。アレと同じ威力の斬撃をもろに受けたマグカルゴはどう感じただろう。厚さ５０？もある鉄の扉を、たった木刀一本で弾き飛ばす力をうけて、まともに立っていられる奴などいない。
恐らくこのマグカルゴの命はもうすぐ絶えるだろう。これを簡単に受け入れていいのか。心を失ったポケモンだからといって殺して、それが簡単に許されることがあっていいのか。それでは役にたたないから殺す、利己主義者と同じではないか。そう感じて下を向く。
すると、この建物の名前であろう何かを刻んだ
パネルがあるのが見えた。
「ん？」
ジュプトルは顔を近づけて、書かれてあるものを読む。そして……
「おい、シアン」
「何？」
中に入っていったシアンを呼び戻す。
そして、パネルを指さす。それには、こう書かれてあった。
『無限目録蔵（インフィニティ・ライブラリィ）』

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：３　開かずの扉（後書き）

……

シアン
「次、２週間以内に更新ね。それか僕の斬撃か」

御免、その罰則だけは許して！

シアン
「なんで？」

死ぬ！　マジ死ぬ！

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：４　無限目録蔵内部（前書き）

シアン
「……更新……」

イエーイ♪　２カ月更新されてないコール出しましたぜよ。

シアン
「喰らってもらおうか。約束通り」

ちょっ――――――――――――！？←断罪

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：４　無限目録蔵内部

シアンが星の調査団に入団して、月日にして約三年が経っていた。その間、星の調査団は“無限目録蔵”の捜査に精を出していた。５０００年の間誰も見つけることが出来なかった、幻とも言われた施設。

それが今、ジュプトルとシアンの目の前にある。

「ここが……“無限目録蔵（インフィニティ・ライブラリィ）”……か……」

ジュプトルは薄暗闇の中を見渡した。広い部屋の中に無数に並べられた本棚。そこに所狭しと並べられた書物。インフィニティ・ライブラリィと名付けられる所以であってもおかしくない光景だった。

「シアン、ちょっとここに残っていろ」

ジュプトルは隣の、少女とも少年とも見れる容姿の相棒に言った。

「え？」

「カイリューにこのことを知らせてくる。それまで見張っておいてくれ」

この御時世、ポケモンの多数が心を失っている以上見張っておく必要性も無いが、それでも念の為、とジュプトルは気を配っておいた。

「分かったよ。なるべく早く帰ってきてね」

シアンはそう言って薄く微笑む。ともすれば美少女とも言われないその可愛らしい仕草に、ジュプトルは何とも言えない感触がした。それが彼に対する好感ではないという感覚がした。

「分かった分かった。もう行く」

そう言ってジュプトルは暗闇の中へ姿を消した。

＞ｉ１８５９７―１８３７＜

「よっと……うわ汚ね」

シアンは松明をつけて部屋を明るくした。そこで見たのはあからさ

まに放置されていたのが分かる程埃がうず高くつもった机や椅子、本棚の数々だった。
「……」
彼は困り顔で部屋の中をうろつき回る。地下へ続く階段があったが、そこにも本棚、本棚、本棚。
地下5階でようやく箒を見つけた。
彼はその中から一番新しそうなのを選び出すと五階から一階まで順序よくはわいていった。そして一階も粗方終わり、という間際でコトッ
「痛っ」
本棚に踵をぶつけた。
その音を感じたのか、一匹のイトマルが飛び出す。イトマルはシアンを見とめると飛びかかってきた。
「うわっ！？」
イトマルを木刀による抜き打ちで叩き潰す。イトマルは本棚にぶつかり気を失った。
だが、派手に暴れたのがいけなかった。
「げ……ちょっとやばいかも……」
眼を覚ましたであろうポケモン達が、ゾロゾロと這い出てきた。彼等は皆シアンの方へ殺気を持った眼を向ける。
「あ……アハハハハハハハハ……うわーーーーーーーーーーっ！！」
シアンは気が狂ったように木刀を振るう。
体力の消耗を抑えるため、コンパクトに木刀を動かす。
それでも攻撃を受けたポケモン達は悶絶しながら倒れていく。
だが、如何せん数が多すぎた。
いくら薙ぎ払っても襲ってくるポケモン達の数は尽きることが無い。
それでもシアンは必至に木刀を振るう。その細い腕に似合わぬ勢いで。風が吹けばすぐさま掻き消えてしまうような華奢な体躯で。
隣からオタチが飛びかかってきた。シアンは袈裟斬りで払い落す。

背後からの急襲を防ぐために常に方向を変えて木刀を振るう。
木刀の一振りがドラピオンの顔面にクリーンヒットした。
激怒して、爪を振り下ろす。爪は一閃され、少年を縦に引き裂く――
――――――
筈だった。
――――――な？
爪はシアンの目の前の地面。そこに突き刺さっていた。
何が起こっていたのかを物語るように、シアンの木刀がかぶせられている。
「たぁっ！」
シアンは動揺しているドラピオンの顎の下から強力な横薙を喰らわせた。
「んがっ！」
その頭は思いっきり仰け反って背後にいたポケモンに当たる。
シアンは直後に一回転し、３６０。全方向のポケモンを薙ぎ倒した。
「アイアンテールッ！」
油断していると、後から鈍痛が飛んできた。そこにはニャルマーがいた。右ストレートでニャルマーを吹き飛ばす。その直後、あまりの痛みにうずくまってしまった。
「けほっ、けほっ」
いまのアイアンテールが効いたのか、思い切りむせている。ポケモン達は、勿論この隙を見逃したりはしない。
「葉っぱカッター！」
「メタルバースト！」
目の前に飛んできた二つの技をなんとか叩き落とす。
だがその瞬間、シアンが大きくよろめいた。
彼の横にいたマダツボミはこの隙を逃しはしなかった。
「蔓の鞭！」
マダツボミから放たれた多くの鞭が彼を襲う。シアンはぐるぐる巻きにされて尻もちをついてしまった。

「メタルクロー！」
メタングが止めを刺そうと向かって来た！
――――――ダメだ！
彼が目を瞑ったその瞬間、
ドッ
と鈍い音がした。
「……？」
そして何も起こらなくなった。シアンが恐る恐る目を開けると、メタングが気を失って転がっていた。
その後ろにいたのはカイリュー。
「シアン、大丈夫かい？」
「カイリューさん！」
「フン、けったいなことをしてないで、さっさとコイツらを蹴散らすぞ」
後から出てきたジュプトルが、シアンを縛り付ける蔓を切った。そして後を向くと、
「いけ！」
と号令を出す。その瞬間、幾つもの鬨の声が重なり、ポケモン達が争い、倒れていった。
「あれ？　星の調査団の皆が……」
「当たりまえだろう？　これからはここが私達の住みかになるんだ。皆ひきつれてこないで、どうするよ？」
カイリューはそう言って、
「皆！　まずはもとからここにいたポケモン達を押しこめるよ！」
「おおーーーーーー！！」

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：４　無限目録蔵内部（後書き）

シアン
「おお。挿し絵表示？　……ちょっと待って」

何か？

シアン
「なんか僕が女の子に見えるんですが」

あーまぁ女顔っていう設定だから。

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：５　戦いの序章（前書き）

文章が酷い……

シアン
「それは今に始まったことじゃないよねｗｗ」

えーと、それからこれの本編（時の記憶）がもうすぐ完結でそっちの方に更新が集中しそうなのでこの小説が遅れるかもしれません

シアン
「おい（怒）」

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：５　戦いの序章

星の調査団と無限目録蔵のポケモン達は睨みあっていた。無限目録蔵地上１階。互いの距離は１０ｍ前後。
だが、配置されている本棚の関係で少し複雑な地形となっていた。
「色々と調べてみたが……これがうちと敵の配置らしいね」
そう言ってカイリューは紙とペンを取り出して何やら書きだした。

＞ｉ２０３４９―１８３７＜

「この○は星（うち）の調査団のポケモン。●は敵のポケモンの配置。散らばってる長方形は書いてあるとおり本棚だ」
「この配置は厄介ね……。相手はチビ共が多いから本棚の影に隠れて奇襲とか可能なんだけど、星（ウチ）の調査団は胡散臭いデカブツが多いから、力で相手を圧す位の事しかできないのよねー」
レイナが悪態を吐いた。
「悪かったな。胡散臭いデカブツで」
隣のリザードンがつまらなそうに答える。それに対しレイナは
「別にアタシは悪いなんて言ってないわよ。ただこういう状況だと不利になるって言ってるのよ。ったく何処のバカかしらね、木刀振りまわしてこんなに本棚を滅茶苦茶にしたのは」

＞ｉ２０３５０―１８３７＜

「まぁまぁ、今更文句言ってもしょうがないじゃん♪」
レイナの悪態にシアンはのほほんとした表情で答える。
「本人が言ってもただの開き直りよボンクラ！」
「二人とも黙れ。今は目先の敵を殲滅するのが先だろうが」
ギャーギャー騒ぎ立てるレイナをリザードンが制した。

「さてさて、ホントにどうしようかねぇ」
カイリューが楽観的な口調で言う。どうでもいいがとても睨みあいの雰囲気とは思えない。
「とりあえずー、刃物と炎を使う攻撃は、書物が至近距離にある場合は使用禁止」
「なっ！？」
レイナの指示にリザードンが詰まった。彼が今使える技は火炎放射、ブラストバーン、メタルクロー、燕返しである。全てレイナの禁止対象の技に入る。
「ちょっと待て！　そりゃないだろ！？　俺戦えなくなるぞ！？」
「あーそっか、アンタ覚えている技が全部刃物系ｏｒ炎系ね……」
レイナは彼を見て少し考え直すふりをしたが
「とりあえず、頑張れば？」
「は？　おい、そんだけか！？　いや、頑張ればの一言ですませてんじゃねえ！」
「しょうがないでしょう。刃物で本が刻まれたらダメだし、炎吐いて無限目録蔵が火事になって焼死しましたーなんて結末は論外よ」
「いや、だから――――――ムガ」
レイナは更に文句を言おうとしたリザードンの口に手を当てると、
「カイリュー、刃物系と火炎系の技を全て使用禁止にして。どうしても、という場合は紙類が側に無い時に限り可能」

「ジュプトル、大丈夫？　刃物系の攻撃は禁止だって」
「少し苦しいが……圧倒的なふりというわけではないからいいだろ」
「そうだね。カイリューさん、さっさと相手に突撃していいかい？」
カイリューはシアンの言葉を聞いて眉を潜めた。
「大丈夫かい？　さっきの戦いの疲れが残ってないか……」
「大丈夫。もう回復したよ」
シアンにそう言われて、彼は返す言葉が無かった。
「……」

一抹の沈黙を置いて、
「良いよ、行きな」
一言。その言葉を聞いた瞬間、シアンとジュプトルは向きがバラバラの本棚の間をすり抜け、目の前にいた敵のポケモン達を叩き飛ばした。
それが戦いの火ぶたとなった。
シアンは最初の敵に一打ち程浴びせた後、すぐに下がり、入口の方へと引き返した。
ジュプトルは電光石火でイトマルを吹き飛ばすと、本棚の上に飛び上がって、敵のポケモン達にタネマシンガンを放った。リザードンは襲い来る敵を片手で止めると、地面に打ち付けた。後から別のポケモンが襲ってきたが、レイナが銀の針で打ち落とした。
カイリューが龍の波動を放つ。レイナが飛び退り、彼女の後にいたモジャンボにぶち当たる。
「グオオオオオ！」
「っ！　シアン、お願い！」
レイナはそう叫ぶと銀の針をモジャンボに投げつけた。シアンが一瞬で肉薄すると木刀で銀の針の柄を殴る。勢いづいた銀の針はモジャンボに刺さったが、モジャンボはそれでは倒れなかった。
「グァオォオ！！！」
「っ……しつこいな」
シアンはボソリと呟くと、モジャンボの顔面に木刀を突き付ける。
その瞬間、モジャンボの視界からシアンが消えた。
「！？」
一瞬で霞みのように消え去った。モジャンボは何が起こったのか分からずにうろたえている。支えを失った木刀はそのまま重力に従って落ち――――――

ることはなく、モジャンボの顔面に食い込んだ。シアンが木刀の柄に回し蹴りを喰らわせていた。
（シアンの奴、なかなかやるじゃない）
レイナはシアンを見て感嘆を覚えた。彼は木刀を突き付けた後、モジャンボの死角に入ったのだ。
体格が大きい故、その死角も大きい。
モジャンボの斜め後ろから、ジャンプして――――――今に至る、というわけだ。

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：６　不思議な夢。そして決着（前書き）

かな～り遅い更新です♪

シアン

「ぶっ飛ばす♪」

え、笑顔のままで言わないで（汗）

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：６　不思議な夢。そして決着

シアンは木刀を振るって三匹のイトマルを薙ぎ倒した。
「エナジーボール！」
ジュプトルの右手から深緑の珠が発生した。ジュプトルはそれをバンギラスにぶつける。
「ゴァオォ！！」
バンギラスは怒ってジュプトルに突進してきた。シアンは裏拳の要領で木刀をぶつける。
「ナイスだシアン。……っと、リーフブレード」
ジュプトルはバンギラスがまた咆えないうちにリーフブレードで止めを刺した。
「倒れたね……」
シアンはそう呟きながら周りを見渡す。無限目録蔵（インフィニティ・ライブラリィ）の狭い部屋の中で、５０程の数のポケモン達が戦いあっている。
「シアン、危ない！」
「！」
ジュプトルに注意されて後ろを向く。後ろからはドラピオンが爪を構えて襲ってきていた。
「危な……」
シアンはギョッとして後ずさる。その時、ドラピオンのシザークロスがシアンの左手の甲を掠った。
痛みに顔を顰めるシアン。だがその時、痛烈な目眩に襲われた。

――――――フラッ

――――――な、何で……こんな戦いの最中に……
シアンは焦った表情を見せるが、彼の目の前のドラピオンは微動だにしない。それどころか彼が見ている光景全てのものが止まってい

る。

――――――何で、あれが発動して――――――っ！

目の前の光景は消え失せ、シアンの視界は真っ暗になる。その真っ暗な中を一本の閃光が走った。閃光の中から光が零れ、一つの光景を映した。

……ドラピオンの後に影が……あれはアリアドス？　が……跳びかかってきた？　そうか、ドラピオンが倒れた瞬間に不意打ちに跳びかかってくるつもりだな。

その瞬間、光は掻き消え目の前にドラピオンがいた。

「ゴァ！」

ドラピオンに動きが戻り、シザークロスを解いて次は切り裂くで向かってきた。シアンは木刀でその爪を叩くとドラピオンの頭に雷のような一撃を落とした。

「グァ……」

ドラピオンはふらつき、その場に倒れた。

瞬間、アリアドスが飛びかかってきた。だが、先程の夢でそれを予知していたシアンにはその一撃をかわすことなど造作もない。

半身を後ろにずらすとアリアドスは勢い余って後ろの壁にぶつかった。シアンは後ろから木刀で殴る。ズガ、と生々しい音が響く。アリアドスは体が曲がり、ピクピクと痙攣している。叩かれた瞬間にミシッと小さ音がしたのは気のせいではないだろう。

「ちょっと優勢になってきたかな？」

未だに口調は楽観的だが、表情は険しいカイリューの声が聞こえる。カイリューはナッシーを蹴り倒すと拳を固めピチューを殴りつけた。

「……私は何のために戦う？　ただ意味も理解せずに戦う」

カイリューがそう呟いた瞬間、彼の顔から全ての感情が抜け落ちた。

周囲のポケモンの動きが硬直する。
「何のために生きるのか訊ねる。ポケモンは答えもせずただ見下した目をするだけ」
シアンはその平淡な声にゾッとした。レイナは目に涙を溜め、ガクガクと震えている。

>i23524—1837<

「い……いきなり何を……」
シアンは恐怖に震え、ここが戦場であることさえ忘れそうになる。
「……この世界は、そんなものなんだよ。命には何の価値も見出せない」
カイリューは技も使っていないし、敵を威嚇するようなポーズもとっていない。ただ氷のような表情を見せているだけ。なのに周囲の喧騒が遥か遠くにあるものように聞こえてしまう。
「……」
そして沈黙。それだけなのに、カイリューと向き合っていた敵のポケモンは無限目録蔵から逃げ出してしまった。
「い、今のは何？」
「何でもないよ。さ、残りの敵をさっさと殲滅しよう」
カイリューはさっきまでの表情が嘘のような笑みを見せる。シアンは戸惑ったままだったが、一つのモーションで夢から放たれた。
「レイナ！」
ポニーテールの少女は暫く震えていたが、その動きを止め、やがて崩れ落ちるように地面に倒れた。
「だ、大丈夫？」
シアンはレイナは抱きかかえた。どうやら恐怖に心が耐えられなかっただけで、致命的なことではないようだ。
「シアン、危ない！」
ジュプトルが後ろから襲いかかってきたレディアンを斬り倒す。

「っ！」
シアンはレイナを片腕で支えながらドクケイルを叩き飛ばした。
カイリューの精神攻撃（？）のお陰で敵の数は大幅に減り、星の調査団が優勢になってきた。

結局のところ、勝利を収めたのは星の調査団だった。無限目録蔵の原住民はこの住み慣れた施設を後にするか、自我を取り戻し、星の調査団の一員になるかのどちらかだった。結論から言えば自我を取り戻したポケモンは何百といた敵達の中で三人だけであった。
「三人でもいないよりはマシだよ」
カイリューは楽しげに言った。星の調査団は現時点で２４人しかいないので、三人でもいないよりはマシというか寧ろ、いると居ないと大違いなのだが。
シアンは戸惑っているような顔を見せている。
カイリューのあの感情の色が見受けられない顔のことではない。敵の行動が予知できるあの事象だ。
――――――まさか、“時空の叫び”が起こるなんて……
時空の叫びは本来、信頼できる者が隣にいないと発動しない。だからこそ彼も時空の叫びの発動を抑えるために、大陸の北の果ての人間の文明から、命がけで北の山脈を越えてきたのだ。
「……知られたくないな……」
シアンはボソッと呟いた。最近になって時折発動する時空の叫び。何故かシアンはその事象を嫌ってさえいた。

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：６　不思議な夢。そして決着（後書き）

レイナ
「毎回思うんだけどシアンってやっぱり女にしか見えないわよね」

シアン
「酷い（涙）」

まぁ、そういう設定にしてあるからｗ　今回シアンをボーイッシュにした絵を描いてみました♪

＞ｉ２３５２６―１８３７＜

シアン
「いや……髪留めが無くなって襟足が短くなったことくらいしか相違点が見当たらないよ……」

ツッコミイクナイｗ　そういや今回カイリューさんの台詞、一部パロってます。

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：７　生きる意味とは（前書き）

えー、更新遅れてすみません……

シアン
「殺す」

ちょ、一言だけじゃなくて何か言ってよ；

シアン
「今回、短いって言ってたね」

うん；つなぎの話だから；

シアン
「次はまともなのを書いてね」

はい……

Rhapsody：7　生きる意味とは

「……うう」
シアンは、目の前の存在に、圧倒されていた。周りは、どす黒い靄がかかっているだけの空間だ。
「お前は……何の為に在る？」
「何の為、って？」
その存在は、ポケモンらしい。太い胴回りと、紅く禍々しく輝く一つの眼を持っている。シアンはその種族を何と言うのか知らなかったが、自分にとって危険な存在であるというのは充分に感じ取れた。
「……自分の命に、意義を見出せないのか？　そんな想いが、こんな世界にあって意味を為すと思うのか？」
「な、何？」
謂われなき非難に、シアンは苛立ちという衝動を覚えた。ポケモンの体に走った黄色い線が鈍く光る。同時に、ポケモンは一つしかない眼を愉悦に浸っているかのように歪めてみせた。
「僕の命の意義が何だと言うんだ？　貴方がそんなことを言ったところで、僕が存在しているという事実は変わらない」
シアンはポケモンを罵るかのように言った。だが、ポケモンはそれに臆することは無い。それどころか、シアンの大きな瞳を見返して、更に眼を歪めた。
「確かに、御前は物理的にはこの世に存在している意味があるかもしれない。だが、精神的にこの世に存在している意味があると言えるか？」
「ど、どういう――――」
「命がある、ということは行動を起こす機会も義務も保障されている、ということだ。貴様はどうだ？　何か、意味のある行動をとれたか？」

「……」
ポケモンに言われて、始めて気が付いた。この世に生きている上で大事なこと。少なくとも、快楽を貪って長々と生きていくことではないはずだ。彼にとって、生きる意味、とは……
「生きる……意味？」
そう考え始めても、答は見つからない。気が付けば目の前のポケモンはいなくなり、自分は真っ暗な世界にいた。上下左右前後の感覚も分からない。
「生きる意味って……何なんだ？」
必至に考えたが、答は見つからない。寧ろ、思考の輪廻にはまって、分からないことが増えていく。
生きる意味――――長く生きることではない――――では何だ？――――そもそも、生きるとはどういうことなのだ？　生きることが何か分かったら、その意味が分からなくなる。生きる意味なんて、本当はないんじゃないか？　いや、そもそも長く生きることが命の在る意味ではない、という信念（ビリーフ）さえ間違っていると思えてくる。どうすれば、どうすれば答が見つかるんだ――――！！
「わぁあああっ！」

今日のシアンの奇声は、星の調査団全員の目覚まし時計代わりとなった。だが、爽やかな目覚めであるにも関わらず、皆表情が不機嫌そうだ。
「仕方ない、仕方ないんだ。シアンが、あんな死にかけの奇声をあげるとは誰が思うだろうか。いや、誰も思いはしない……」
ジュプトルは何やらぶつぶつと反語表現を呟いていた。シアンの声は透明感があり瑞々しい、謂わば美声なのだが、起きざまにシアンが放った奇声は割れ鐘のようで、美声とは程遠いものだった。星の調査団の全員は、これを目覚まし代わりに起きたのだ。不機嫌極まりないのも頷けるだろう。

「ご、ごめんね。ちょっと変な夢見ちゃったんだ」
「どんな夢？」
シアンの弁解に、レイナがすぐさま興味を示す。シアンは、
「全く知らない人（ポケモン）に、生きている意味がどうとかくどくど問われたんだよ」
とだけ説明しておいた。勿論、これでは説明不足は否めない。
「アタシ達はそんなくだらない夢の為にこんなジメジメした目覚めを体験することになったのね……」
彼から説明を受けたレイナは肩を落としてそう言っていたが、やがて立ち直ると、本棚から一冊の書物を取り出した。
「まぁいいわ。のろのろしてる暇は無いのよ。まずこの本を翻訳しないと」
「え？」
“翻訳”という言葉に引っ掛かりを覚えたシアンはレイナから書物を受け取ると、徐ろにその一ページを開いた。そこに並んでいたのは、到底意味も理解できない、謎の記号の羅列だった。
「おい、これ読めないぞ……」
横から覗き込んだジュプトルがだるそうに言った。
「読めないから、翻訳するの。セレビィ、ちょっと良いかしら？」
レイナはぞんざいに返すと、無限目録蔵の奥に向かって、呼びかけた。すぐに一人ポケモンが現れた。玉葱のような丸い頭に黒く縁どられた眼。ライムグリーンの体から、透明の羽を伸ばした彼女は、口をキュッと引き結び、氷のように冷たい視線を放っている。名は、セレビィというらしい。
「レイナ、呼んだ？」
シアンは元々彼女が好きではなかった。それは、裏を返して嫌い、という意味の好きではない、ということではなく、単に苦手なのだ。射るような鋭い視線や、嘲るような平淡な声がする度、心をくりぬかれた感触が背筋を撫でまわす。
「この本を解読したいの。これが何語で構成されてあって、その言

語が何時の時代に作られていたのか、貴方の時渡りで調べてくれる？」
レイナはそんな彼女に臆することは無く、柔らかな笑みを浮かべながら彼女に本を手渡した。
「了解したわ」
セレビィは短くそう答えると、ジュプトルを睨みつけて去っていった。

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：７　生きる意味とは（後書き）

シアン
「セレビィ怖いよ；」

怖気づくでないｗ

レイナ
「夢、気になるわね……」

今回シアンの夢に出たポケモン、普通に分かるかと思います。でも分かっても閉口しておいてください↑

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：８　時を司る聖域（前書き）

さてさて、今回、あの御方が持ち前のツンデレっぷりを発揮しますよｗ

シアン

「あの御方って……」

新伝説本編を知っている方は想像がつくよ。容易に。

Rhapsody：8　時を司る聖域

無限目録蔵の薄暗い一室。ここに、一人のセレビィがいた。
「セレビィ、解読は済んだかしら」
目を閉じて神経の全てを、書物に当てている掌一点に集中させるセレビィの平静をかき乱すかのようなタイミングでレイナがセレビィの後に立った。
「レイナ……？　うん……書かれてあることの半分くらいは読みとれたわ」
「凄いわ。流石は時渡りポケモンね。古代文字も解読する技術を持っているなんて」
ポニーテールの少女・レイナが示すのは、セレビィ族独自の能力。とはいえ、セレビィが種族特有の時渡り能力を応用して作り上げた彼女のオリジンの技なので、「独自の」と言えば、そこに語弊は生じる。
「で？　この古代書にはなんと書かれてあったの？」
レイナは嬉しそうに目を細めながらセレビィを急かす。セレビィは、一世一代の発見を発表するかのように神妙な面持ちになり、彼女のトレードマークでもある黒く縁どられた眼を揺らした。
「うん……翻訳できた部分までをかいつまんで言うとね……」
数千年前の世界。即ち、まだ時間が動いており、この世界に色というものが溢れ、ポケモンにも人間にも心があった時代――――その時代の時間は、「時源の塔」という聖域に住む神が管理していた。だが、ある日を境に塔は崩壊への道をひた走っていった。それが何故なのかは誰にも分からない。ただ皆がそれを知らずに暮らしていくうちに、遂に塔は完全な崩壊を迎えた。その瞬間、世界から「光」が消えた。美しい光景から「色」が消えた。ありとあらゆる命から「心」が消えた。
「――――私が翻訳したのはここまでよ。といっても、この後まと

もな記述があるとは思えないんだけどね」
　セレビィは肩をすくめて言った。レイナは目を丸くする。
「どうして？」
「言い損ねたんだけど、これはエッセイ、って言うのかな？　そういう類の書物なの。時源の塔についてのことが書かれていたのは、著者が時源の塔付近に住んでいたから……でも、時源の塔付近に住んでいたってことは、その崩壊の影響を多く受けるってことみたい。だから……」
「精神的に狂った状態で書かれているかもしれないってわけね？」
　レイナが続けて放った言葉に、セレビィは無言で返事をした。レイナは薄く笑みを浮かべると、朗らかな口調で言った。
「それで良いわ。『時源の塔』のことが分かっただけで収穫よ。その場所は分かる？」
　レイナはセレビィに次の要求を出した。セレビィは少しの困惑を表情に混ぜ、書物のページを繰り始めた。そして、この大陸の地図らしきものが書かれてあるページで手を止めると、本を手にとってレイナに見せた。右手である一点を指しながら。
「ここ……アンノーン文字で『Ｖｉｓｉｏｎａｒｙ　ｃｏｎｔｉｎｅｎｔ』……幻の大地って書いてあるでしょう。ここは時の狭間に隠された秘境なの。ここに、もしかしたら時源の塔が隠されているかもしれない」
「詳しいことは分からないのね？」
「うん。はっきり言えば、時源の塔付近で出たエッセイが無限目録蔵に収監されているのも奇跡に近いわね。ここは大陸の極東に位置しているから……」
「……何にしても、時源の塔、のもとまで行ってみるのが得策ね」
　レイナはそう言うと、部屋を出た。そして肩まで伸びた髪を頭の周りに散乱させながら机に突っ伏して爆睡している少年の元へ歩いていくと――――
「ほら起きなさい馬鹿」

「んぁっ！？」
その後頭部に軽いチョップを落とした。彼の粉雪のようにサラサラの髪では、本来の役割である頭の保護など難しい。
「痛い……どうしたの、レイナ」
眠りから急に起こされたが故に、締まらない顔のまま、レイナを見上げた。
「シアン、今からここに行ってきなさい」
レイナはシアンが突っ伏していたテーブルに地図を置くと、その最西端――――所謂、時源の塔を指さした。
「え……？　いやいや、ちょっと待って。ここは大陸の極東にあたるところなんだよ？　ここまで行って帰ってくるとなればどれぐらいかかるか分か」
瞬間、レイナの拳がテーブルに落ちて轟音をたてた。
「行ってきなさい」
「はい」
レイナは至極可愛らしい笑顔で言っただけなのだが、さっきの行為を見ると、その笑顔に裏がありそうで――――逆らったら殺されそう、と直感したシアンは二つ返事をせざるを得なかった。
「でも……やっぱり遠いなぁ……リザードンに飛んで送ってもらっちゃダメかな」
「アイツは後数日帰ってこないって。なんでも、食料の調達にでかけたらしいわよ」
便利なものは、必要な時に限ってそこにないものである。シアンは泣きそうな目でレイナを見た。ここから時源の塔まで徒歩で行くのはお許し願いたい、と。
「ちょっと……ねぇ、そんな目をされても……カイリューは何か調べ物してるし……他の飛行ポケモンも、ここまで遠いとなると連れて行ってはくれないと思うわよ」
「なら誰か同行させてよ」
シアンはそう頼んだが、レイナは誰を配属させるか、という当て

がない。強いて言うなら自分自身か……。
……自分自身？
「……」
当てがない、という状況から出た答に、レイナはほんのりと頬を染めた。シアンは何があったのか分からないという風に首をかしげている。
「……ア、アタシが行ってあげても、いいけど」
瞬間、シアンの眼が丸くなり、それに伴うように元来大きかった目が大きく見開かれる。
「……君が？」
「べ、別にアタシはただ暇なだけで行ってあげるっていうだけよ！　アタシがいやなら一人で行くしかないわよ？」
そんなこと言っても……と思いつつ部屋を見渡すシアン。その視界に映るのは、七人で固まって爆睡しているタマタマ。先程のシアン同様、机に突っ伏して、何故か背表紙を上に向けて伏せた本を頭に被せているブースター。そして星の停止との関係性を殆ど見出せなさそうな文学作品を捲っているオーダイル。
「……この面子の中から、なんで僕を選んだわけ？　他の誰でも良かった気がするけど」
「む、無作為にアンタを選んだだけよ。それよりどうするの？　アタシが一緒に行った方が、えと、良いのかしら？」
台詞を言うにつれ、レイナの顔が徐々に紅潮していく。
「うーん……」
シアンは数十秒間黙りこんで、やがて口を開くと言った。
「君が来たいって言うなら来てもい」
言い終わらないうちにレイナの拳が、今度は割と本気で落ちてきた。
結局のところ、レイナはシアンが出立の準備を終えた頃、同じく出立する格好でシアンの前に現れた。

「え、来るの？」
シアンが驚いた表情で尋ねると、レイナは訊ね返した。
「来たら悪いのかしら？」
「いや、別に……」
レイナが蔵の扉を開けて先に外へ出た。そこへシアンも続く。外は暗雲が空の全面に立ちこめていて暗く、また空気の流れも一切ない。今までずっと無限目録蔵の中にいて分からなかったが、この光景を見て、世界は星の停止に包まれているのだと再認識した。
「で……今から時源の塔ってところに行くわけだけど……準備は良い？」
レイナが振り返った時、シアンは背中を見せながら、
「ごめん、木刀忘れてた！」
と言って扉の奥へ戻った。
なんというか、先が思いやられそうな気がしなくもないレイナであった。

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：８　時を司る聖域（後書き）

さて、次は時源の塔への旅路、かな？　恋する少女のことを考えるとラブコメを乱発させてあげた（殴）

レイナ
「余計なことすんじゃないわよ馬鹿！／／／」

ジュプ兄
「おいレイナ。顔が赤いぞ」

レイナ
「うっさい！」

因みに、ジュプ兄が一切登場しなかった点についてはご愛敬を。

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：９　至る道（前書き）

シアン
「久しぶりの更新だね～。前話の投稿日がえらく恐ろしいんだけど」
い、いや、違うんだ。これには訳があるんだ。だからその木刀を振りまわすのはやめぅおぁ！？
レイナ
「……一度痛い目に遭えば分かるかもしれないわね」

Rhapsody：9　至る道

「あれ、シアンとレイナは何処行ったかな？」
物音一つしない寒々とした部屋の中、無限目録蔵の一階まで上がって来たカイリューは周囲を見渡しながら気付いたことを口にした。
「お二人なら『時源の塔を探す』と仰ってました恐らく今頃は東の森に到達してるかと」
セレビィが抑揚少ない口調で言った。黒く縁どられた眼は冷ややかに光っている。カイリューは、その温度の低さに怯むことなく訊ねた。若干期待の片鱗のようなものが口調に含まれていたのは気のせいだろうか。
「探すって……二人だけかい？」
「ええ。何か」
最後のセレビィの問には答えなかったが、カイリューの目は、細くなっていた。何やら面白いことを想像している者がするような表情だ。
「そっか、二人だけか。ははは」
「変態親父が欲情するようなシーンはありませんから」
セレビィは不快そうな口調で言うと、そっぽを向いた。彼女に詰られるのもまた一興とばかりに、カイリューは表情を変えなかった。そのまま無限目録蔵を出た。
外はモノクロの世界。大気が蠢き、風が吹くことも無い。重力というものが失われてしまったかのように、岩や葉が浮遊している。星の停止が起きて数千年来太陽は動かず、よって空には星が飾られている。しかし星は瞬かず、また星の自転も無い故にその場から動くことも無い。この空を何度となく見上げてきた。そして、過去の話――――まだ世界が光に包まれていた頃の話を聞き、世界を変えようと思った。だからこそ、星の調査団を結成したのだ。だが、当初は闇の中でも輝かしく見えたその活動は、今ではこの星の時間の

ように停止しつつある。皆。無限目録蔵内の書物を調べるという作業に音を上げ始めた。最早限界か。後は手に入れた情報をもとに、外へ動き出していくしかないのだが……。

「無理だろうねぇ。今まで部屋の中で缶詰状態だったんだし」

彼の言うところは、当分それは難しいということだった。活動的な人間二人、頑張ってくれているが、それでも人手は足りない。エネコの手でも借りたいところだ。

カイリューは、ジレンマを振り払うかのごとく翼をはためかせた。周囲に自然では起こる筈のない竜巻きが起こる。それを感知したのか、後にある気配が現れた。

「カイリュー、出かけるのか？」

その声に反応し、彼は後ろを向いた。見てとれたのは、緑色の華奢な体とそれに纏わりつく葉っぱの数々。

「ジュプトル？　どうかしたのかい？」

カイリューは柔和な表情で言い返した。ジュプトルはそれに返事をするまでもないと表情で言いながら、しかし一応答えを返した。

「お前が外に出て翼を広げていたら、訊ねずにはいられないだろうが。どこか所用でもあるのか？」

「うーん、いや、ないけどね。ちょっとばかし散歩にでも行ってこようかな」

「散歩だと？」

ジュプトルは怪訝な声色を作りだした。こんな暗黒の世界を徘徊して回って何を見るというのだ？　そんなことをするよりは、無限目録蔵の書物を読み漁った方がいいだろうに。自分達に与えられた時間はそう多くないだろうに。

「ああ、ちょっとうろついてから帰ってくるよ。まぁ留守番なんて頼むまでもないよね？」

そういうと、黄金色の巨体は空へ飛び立った。

それは、開けた草原の中央部での出来事だった。

「シアン、そっちは頼んだわよ」
レイナは目の前のフローゼルと対峙しながら、後方で木刀を構えているシアンに言った。シアンは、アブソルを目の前に木刀の切っ先の位置を調整する。
「構わないけどさ……っとぉ！」
アブソルが振るった鎌鼬を、シアンは木刀でいなす。体勢が崩れたアブソルを、蹴り飛ばそうとしたが敵がすんでのところで回避行動をとった。
踵を返して仰け反るようにジャンプし、後方に着地した。また電光石火で向かって来たところを、シアンは上方への跳躍で回避する。アブソルは急停止してシアンの方を振り向いた。シアンは上段に木刀を構え、アブソルの攻撃を待つ。

＞i３３７４６―１８３７＜

現在のシアンは些か受動的である。敵の行動を見て自分が何をするか考える。自分からは絶対に動かない。そういった姿勢を見せている。今もアブソルの鎌鼬を木刀で薙いで掻き消して、防ぐことに専念している。
特に心情的に何かあったわけではない。
――――アブソルなんかに攻撃を受けたら、致命的だからね――――
アブソルというのは、攻撃力においては全ポケモンの中でもトップクラスである。攻撃を受けることは、即ち自ら死にゆくことと同等である。それ故にシアンは奥手になって、受動的な姿勢をとるのだ。しかし、戦略的な意味もとっている。アブソルが燕返しを振るえば、それに怪我をしないよう手刀をあてて防ぎ、電光石火で突っこんできた場合には木刀を振るって追い払う。そうしていくうちに、勝利は近づいてくる。
元々、アブソルは体力や防御力が低く、長期戦には向かないポケモンである。よって、相手に技を当てられずに戦いが長引けば長引

くほど不利になっていく。それゆえ、シアンは極力攻撃を受けることを避け、逆にこちらから攻撃するチャンスが巡ってくるのを待っているのだ。
アブソルが頭の角を振りまわし、燕返しを連続で放った。シアンはそれを木刀で全て弾き返していく。無造作に。だが、丁寧に。次に飛んできた鎌鼬は、シアンの首を斬りおとすことなく空を引き裂いた。アブソルは目の焦点が合わなくなってきているのだろう。それを予感させた。
――――さぁ、機は熟した！
シアンは恰好つけた台詞を心の中で叫びながらアブソルに少ない歩幅で肉薄する。その脇腹を一打ちして、更に回し蹴りを振り翳した。アブソルはシアンの脚が飛んできた瞬間、跳び退ってかわそうとしたが足がふらついた。恐らく、スタミナの消耗によって。
アブソルの肩に、激痛が食い込んだ。衝撃がアブソルを吹き飛ばし、意識が彼に、一時の別れを告げた。
「レイナ、こっちは終わったよ」
シアンは安堵と共に彼女を振り向いた。そのとき彼が見たものは、彼を驚きへと導き、同時に焦りを引き起こす現象だった。端的に説明すれば、『レイナがフローゼルに木の幹に押しつけられていた』だけのことだった。だが、両肩を抑えられ、抵抗もままならないレイナに水鉄砲を叩きつけようとしていたフローゼルを見て、シアンは一瞬自分の存在がなくなっているかのような気分の高揚を感じた。
「やめろっ！」
シアンは脚力を伴って跳躍し、フローゼルに木刀を叩きつけようとした。しかし、フローゼルはレイナの肩から手を離し、紙一重でかわした。シアンは更に肉薄し、フローゼルにあらゆる方向から木刀を振った。フローゼルはそれをかわしてゆく。時折木刀の先がフローゼルの腹を擦る。そのたびに彼は痛みを感じて顔を顰めるが、そのまま悪鬼の表情に戻る。
「痛い……」

レイナが押さえられていた肩は、フローゼルの爪が潜り込んでいたのだろう。白いカッターシャツが肩の部分だけ赤く染まっている。一時の恐怖から抜け出し、シアンが戦ってくれているという安堵もあってか、レイナは木の幹に背中を預け、座り込んだ。しかし、そのつもりだった。

「え？」

背中には木の幹が無い。代わりにあったのは、今まで気付かなかったため高さ的には彼女の膝ぐらいまでしか無かったのだろうが、それでも小柄なレイナ一人は充分に通り抜けできる程度の大きさの洞（うろ）があった。

「いやっ、ちょっとシアン！　助け――――」

発そうとした言葉の全てを言いきれないまま、レイナは頭から洞の中に吸い込まれていった。

Ｒｈａｐｓｏｄｙ：９　至る道（後書き）

常々シアンを男の娘設定設定にしたのは若干ミスったと思っとります。何で受けると思ったんだろうなぁ。とりあえずこの小説を書き始めた時の自分、表出ろ。

今回の挿絵のシアンは一応凛々しく描いたつもりです。しかし書いてるうちにシャナっぽくなってきた；

追記ー、後で挿絵の変更と追加あるかもです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8972o/

輝く世界を求めて　～歴史改変者達の戦い～

2011年10月29日01時20分発行